

# 田中ORT(視能訓練士)のちょっといい話

## 見えるってどういうこと?～視覚のはたらき

### 第10回(全10回). まとめ～『見える』『見てわかる』ために必要なこと

4月からお付き合いいただいたこのシリーズも最終回を迎えました。これまでの9回でお話してきたことをまとめてみましょう。

視覚は、人間が外界を感知するための感覚(視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚)の8割を担っています。視力(文字を読み取る等)だけでなく、視野(周辺の情報)も重要な役割を果たしています。

#### 視覚情報を、正確に、素速く得るために必要なもの

##### ①曇りのない透明な目

→黒目が濁っていたり、レンズが濁っていたり(白内障)すると、光が遮られます。

##### ②光を受け取るきれいな網膜

→網膜が傷んでいると、画質良く映りません。視力だけでなく視野にも影響します。

##### ③ピントの合ったレンズ

→焦点が合っていないとピンボケの映像になります。裸眼(自分の目のレンズ)でピントが合わなければ、眼鏡・コンタクトレンズで矯正すれば良いのです。

##### ④目と中枢を繋ぐ視神経

→視神経そのものの病気のほか、通り道である脳の病変の影響を受けます。

##### ⑤情報を受け取って映像化する脳

→後頭部に中枢があります。眼球が健康でも脳の障害で視力や視野が障害されます。

欠落した視覚情報を補完・修正して『本当は見えていないもの』まで見せることも。

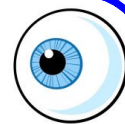
##### ⑥情報を解析して意味や位置を知る脳

→頭頂部や側頭部に中枢があります。『見えるけど、何なのかわからない』ことも。

##### ⑦見たいものに正確に目を向ける眼球運動(脳が制御します。)

→的確に動かないと、視力が良くても読書等で苦勞します。

※ ①～③と⑦は視覚情報の入力役割、④～⑥は入力後の情報処理の役割



赤ちゃんの目はぼんやりとしか見えていませんが、クリアな映像を脳に送り続けることで視覚中枢を鍛え、視力が発達します。乳幼児期にそれを阻害する何らかの疾患や遠視等があると、視力が発達しないまま低視力の状態で固定してしまいます。『よく見える』見え方を経験したことの無い子どもにとってはそれが当たり前の見え方で、「見えない」と訴えることはありません。年齢相応に視力が発達していないことは、大人が気付いてあげなければならないのです。見る様子の異常に気付いたらなるべく早く受診しましょう。また、異常がないように思っても、3歳児健診にはしっかり準備(練習)して臨みましょう!



一方、大人の視力を低下させるのは後天的な疾患です。大人は子どもと違い、病気の発見・治療は自分の意思でできますので、定期的な検診や受診を心がけましょう。

<おわりに> 盲学校での相談では、もっと早くから支援ができていたら、もっと発達が促せたのでは?と思うお子さんに出会います。眼科では、見えにくくなった患者さんが「目が一番大事…」としみじみ言うのをよく耳にします。子どもにとっては発達全体を左右する、大人にとっては生活の質を左右する視覚と、真剣に向き合ってみませんか?

